「審査の結果の要旨」の概要

1. 課程・論文博士の別　　課程博士

2. 申請者氏名（ふりがな）　　LEHNER DANIELA(レーナ･ダニエラ)

3. 学位の種類　　博士(工学)

4. 学位記番号　　博士　第 5685 号

5. 学位授与年月日　　平成 16 年 3 月 25 日

論文題目　　THE LANGUAGE OF ARCHITECTURE, DANCE AND MUSIC
A Syntactical Approach to the Designing Process from Known to New as a Translation of Language
建築, 舞踊, 音楽の言語
言語の翻訳としての既知から創造へのデザイン
プロセスに対する構文的アプローチに関する研究

6. 審査委員会委員　　（主査）　東京大学教授　長澤　泰
教授　鈴木博之
助教授　西出和彦
助教授　曲渕英邦
助教授　千葉　学

7. 提出ファイルの仕様等　提出ファイル名　使用アプリケーション　OS
ダニエラ doc.　Word 2000　Win 98

審査の結果の要旨

氏 名　　LEHNER DANIELA(レーナ・ダニエラ)

論文題目　　THE LANGUAGE OF ARCHITECTURE, DANCE AND MUSIC
Syntactical Approach to the Designing Process from Known to New as a Translation of Language
建築，舞踊，音楽の言語
言語の翻訳としての既知から創造へのデザインプロセスに対する構文的アプローチに関する研究

この論文は、建築，舞踊，音楽という芸術を言語の体系として構文的な視点から比較考察し、これまで人類が育み、所有してきた芸術・知識から今後新しいものをつくり出すアプローチを策定する目的を持つものである。

本論文は、序章ならびに二部６章より構成される。

序章では、和文・英文の梗概のほか、研究の目的・方法を述べている。

第一部では、建築、舞踊、音楽の言語とそれらの関係性をあつかっている。

第１章では、研究の背景、つまり芸術の最も古い機能の一つはコミュニケーションであり、古代には主に超自然的存在との意思疎通、後世では芸術家と観客との意思疎通の道具として聴覚の芸術、運動の芸術、視覚の芸術という3つの種類に分割個別化してったが、今この 3 つを比較し結合することにより「真の芸術」と呼ぶものを創り出す可能性を論じている。。

第２章では、様々な芸術における類似性と相違性を提示し、それら間の翻訳の可能性を論じている。とくに建築、舞踊、音楽の間にはこれまでの研究・考察により、数字と数学に基づく調和の比率、組織と構造、共感覚、時間と空間の関係という4つのグループに分けられると述べて、それぞれの考察を行い、そしていくつかの建築作品について実例分析を行っている。

第３章では、コミュニケーションをはかる道具として、建築、舞踊、音楽の言語について論じている。特にSaussure とchomskyの紹介を通して自然言語と人工言語との比較を行い、この 3 つの芸術を意味的（semantics）と構文的（Syntax）観点から、建築と音楽はその評価基準毎にアンチテーゼを作り、その中間に統合として舞踊があるとしている。舞踊を空間と時間の芸術として、その 2 つを結びつけるものとして位置付け、建築、舞踊、音楽それぞれのと的な視点からの比較を行っている。

第二部では、既知から未知へ：言語間の翻訳についてあつかっている。

第 4 章では、第一部で考察した芸術の言語性から、より具体的な言語間の翻訳を試みている。特にデザイン言語の分析・生成する道具として Stiny と Gips が発案した Shape Grammars について延べている。つまり、抽象化の方法、Shape Grammars への疑問点、利点と欠点について考察し翻訳文法を提案している。

第５章では、以上の論議された芸術間の関係性・対比性をを基盤にした翻訳文法を用いて、具体的に音楽から建築への翻訳を試みている。まず段階的に、ステップ１として音から形へ、ステップ２として形態変換規則、ステップ３として、全体翻訳の完成段階を示している。

第６章では、これまでの各章のまとめとしての結論と本研究の限界と今後のの方向性について述べている

以上のように、本論文は視覚芸術の代表としての建築、運動芸術の代表としての舞踊、聴覚芸術の代表としての音楽における新しい芸術の創造を目的として芸術言語間の翻訳文法の提案をしたものであり、哲学を含めた多方面の既存の知識体系を統括して、各種芸術間の関係性を建築を中心に考察したもので、建築学の基本的な知見を示し、その発展に大きな寄与したものである。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。